

—学期始発の急ぎすぎた保育者

阿部 康子

九月四日（火）

二学期が始まって三日目の朝、園庭の築山では蝉を捕ろうと桜の大木に群れる子どもたち、砂場に水を入れて嬉しがる子どもたち、と園内の隅々に子どもたちの歓声と賑わいが戻ってきた。

保育室にも再び子どもたちの遊びが始まり、「お外へ行ってきます」と園庭へ出て行った、たつま、りょうへい、ゆうすけ、たかゆき、こうきは冒険小屋を中心に戦争始めた。冒険小屋から十メートル位離れた

位置に縦一列に並び、出発点から全速力で駆け、弾みをつけ、ロープを握って一気に駆け登り、橋を渡り、もう一方の開口部から飛び降りるというもので、その速さと、途中止まらないという二点が条件という。こうきはものすごい馬力でロープを手に駆け登るとあつという間に飛び降りてくる。なんといつてもこうきが抜群の強さで、得意満面である。そんなこうきに反発して、こうきがちょっとでもへまをすると、皆が「できんかった！」とはやし立てる。こうきは敏感に反応

し、泣きながら「今ちょっとだけだわ」と怒りをぶつける。

こんなやりとりは一学期後半には互いに収まつていたのに、とも思い、夏休みという空白の中で、友達との関係が一時とぎれて、よりどころがなくなつた為、

こんな形で感覚を取り戻そうとしているのかもしれない、とも思いながらとにかく登る時にロープを離さないこと、飛び降りでは膝を曲げて着地することなどに十分注意するように言い残して保育室へ戻る。

保育室はここでも、四人の子どもがお休みの空白感を埋め合つていて思え、電話のお話ごつこの行方を見ることにした。

しばらくするれみとさくみがままごとコーナーから指人形の青い鳥と蜜蜂を持つて一人で会話を始めた。「蜂さんこんにちは」「こんにちは、鳥さんお元気ですか」「遊びにいきましょう」と至極簡単なものであつたが、あやみが「面白い!」と手を打つて見る。その様子を見て、近くで恐竜を描いていたりようだが、面白そうと「僕も入れて」と仲間入りする。園庭へ蝉捕りに行つていた、ななこ、さとこ、あやかが保育室に戻つてきた。三人は「なにやつとるの?」とお家ごつこの賑わいに吸い寄せられていった。

私は、ななこ、さとこ、あやかたちが、一学期、お花の本などなぞブック、お化けの話など、描きためたものをホッチキスで止め、絵本と言つて楽しんでいたことから、ひょっとしたら、れみ、さくみの指人形を使つてのお話ごっこから、何か生まれるかもしけない、小さな、ほんの少しのペープサートでもいいな、と思ひながら成り行きを見る。

しばらく青い鳥と蜜蜂の会話を見ていたあやかが、「わたしピクニックごっこする、れみちゃんやろう」と誘う。近くにいたあすかが「わたしやる」と二人で積み木の家の隣のままごとコーナーへ入つていった。それを見たれみ、あやみも「わたしもやる」とままごとコーナーへ。残つたさくみ、みさとは、れみ、あやみの姿を目で追いながら「どうしてやめる?」とぶつぶつ言う。一人だけになつた積み木の家に空間が広がつた。ちょっと淋しさが漂つた時、さとこが「入つてもいい?」と仲間入りする。二人はさとこを歓迎。さとこはれみに替わつて青い鳥の指人形を手にはめ、

蜜蜂のさくみと会話を始める。「私おなかが空いたけど」「虫さんはあつちにいます」「一緒に食べに行きましょう」と、次第に青い鳥と蜜蜂の物語を演じるようになった。「面白い!」とみさとが手を叩く。楽しい雰囲気が再び戻つたが、何回も繰り返すうち「うさぎと亀の話にしよう」とさとこが言い出し、紙にさとこはうさぎ、さくみは亀を描き、アストロ棒(広告紙を巻いたもの)に貼つてペープサートを作つた。劇場ごっこをやろう"ということになつたが、降園時間十一時三十分という今日は、もうすでに十一時を回つている。"明日やろうね"と約束して今日は終わつた。

九月五日(水)

さとこ、さくみの二人は再び積み木の家を作り、昨日作つた「うさぎと亀」のペープサートで遊び始めた。保育者が二人に「お友達と見にきていい?」と聞くと、「まだ練習中」と言う。そしてなかなか始まらない。どうしたのかと聞くと、さとこが「さくみちゃんない。どうしたのかと聞くと、さとこが「さくみちゃん

んのお話と違うもんで」。つまり、二人の知っているストーリーが異なるというのである。二人の話を聞いてみると、一人ともうさぎさんと亀さんがかけくらべをした、足の速いうさぎさんが油断をして寝ているうちに、休まず走った亀さんが勝った、というのは分つていてるが、途中経過が違う。どちらの話に合わせるか、どう折り合わせるかに迷った保育者は、一学期何度も絵本を読み聞かせたり、素話として語つたり、子どもたちの間でも絵本が読まれていたことから、「三匹のやぎのがらがらどん」のお話にしてみてはどうか、と提案する。二人は「うん、そうする！」と賛成したが、さくみが「絵が描けんもん」と困った様子に、「せんせいもお手伝いするわ」と、ペープサートは「三匹のやぎのがらがらどん」に変更することになった。さとこは「私は中やぎを描く」、さくみは「小やぎ」「トロルはせんせいが描いて」ということで、作業が始まった。

空箱でビー玉迷路を作っていた、ゆうき、りょう

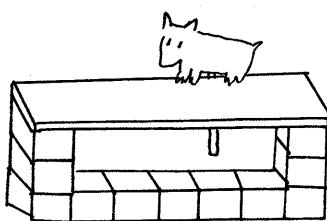
た、てつやが「がらがらどん描いとる」「僕もやる」と仲間入りして、「トロルの目玉はもつとギヨギヨ口だよ」「怖い顔だよ」「小さいやぎが大きすぎる」などのアドバイスをする。「そんなこと言つたって分らんもん」で怒りだすさくみに、「がらがらどんの絵本を見れば？」と、ゆうきは図書室から借りてくる。などなどで賄やかに作業は進み、なんとか三匹のやぎとトロルの絵が出来上がる。後は子どもたちに任せて、園庭に出ている子どもたちの様子を見に行く。

あや、ひとみ、みかこの三人が、ブランコを最大限にゆらしている。「危ないの」と注意すると、「私たち、

に」と注意すると、「私たち、ブランコ大会やつてるの」と

言う。よく聞くと「ブランコ

の前にある楠の高い枝に足で触つてこれたら一点で、点数の高い人が勝ち」と言うのだ。びっくりして「危ないの



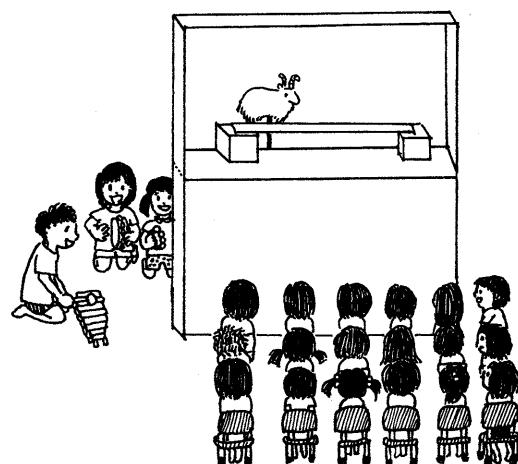
▲積み木の舞台

らよく注意してね」と声を掛け、部屋へ戻る。

がらがらどんいかに、と見ると、なんとゆうき、てつや、りょうた、ことむが積み木の舞台で演じているではないか。さとこたちは? と探すと、さとことさくみは見物人となつて応援しているではないか。保育者の胸の中は「どうしてさと」とさくみはやっていないの、なぜ」の思いが広がつた。そんな保育者の思いをよそに、ゆうすけ、たつま、こうきたちが「やらせて、やらせて」とペープサートに仲間入りし、役交代しながら次々と降園時間まで続けられた。今日の思ひがけない成り行きに、保育者としての私は「うさぎと亀であつたらよかつたのだろうか、私の中に“がらがらどんなら、皆が知っている。今をチャンスに皆で楽しんでほしい”という思いが働いたのは確かなのだから……と、自分を責めながら。

九月六日（木）

たつま、ゆうすけ、こうき、りょうたは朝、登園す



▲小さいやぎは鉄琴の高音で、中やぎは鈴で、大きいやぎはタンバリンで音をつけることになった。

るなり、「がらがらどんやろう」と昨日の積み木のステージに腰を掛け話し合いが始まった。私は他用でその場からしばらく離れていたが、部屋へ戻つてみると右の図のように舞台と客席が設けられ、年少組さんが見物客として並べられたいすに腰掛け、「がらがらどん」の始まるのを先生と一緒に待つていた。



▲2日目の舞台の様子

ゆうすけの提案で「やぎが橋を渡る時の音を出そ
う」ということになり、小さいやぎは鉄琴の高音で、
中やぎは鈴で、大きいやぎはタンバリンで音をつける
ことになった、ということであった。ゆうすけはさく
みとみさとに「中やぎ！ 鈴だよ。大きいやぎ！ タ
ンバリン」と声を掛けてやぎの出番を知らせる。自分
では小さいやぎの鉄琴を打ち鳴らす、とすごく満足そ
うな表情で演出を担当。絵を動かす人には、たつま、
こうき、さとこ、りょうたがあたり、たかゆきは「そ
うだ！」切符がいるわ」と、「ちけつと」と書いた紙
をどんどん作って、「はい！ 切符」と言いながら見
ている人達に配っていた（昨日気になっていた、さと
ことさくみのうさぎと亀については、今日この二人が
参加している姿から、一応よかつたのかもしれない、
と何も言わないことにした）。

ストーリーはきちんと語られていないが、絵が動く
こと、物語がだいたい分かっていることで、年少さん
に何となく分かってもらえたようで、三回もアンコー

ルを受け、嬉しい様子であつた。気をよくした子ども

たちは、役を交代しながら演じ、チケットも、りょう
へいの発案で絵入りのものに変わつていった。

そこへ、ゆうきが登園してきた。ゆうきは部屋の様
子を見て、第一声「なんであんなところで（がらがら
どんを）やつとる」と、私に全身で怒りをぶつけてき
た。「うん、そうか、ゆうき君は積み木の方が好き
だつたのね。でもたつま君やりようした君たちも、小さ
いお友達に見てもらうにはどうしたらいいかな、と考
えて新しい舞台を作つたのよ、ゆうき君も一緒にやろ
うよ」となだめながら誘つたが、「いやだ!」と言つ
た。ゆうきの作った舞台でやりたい!」と言い張る。こ
の様子を新しい舞台から眺めていたりようたが、

「こっちの舞台でないとダメ!」と叫ぶように言いな
がら私とゆうきの間へ割つて入つてきた。ここから二
人の喧嘩が始まつた。二人とも互いに譲らず、自分の
言い分を言い張つて聞かず、揚げ句泣きながらつかみ
合いとなつてしまつた。居合わせた子どもたちも二人

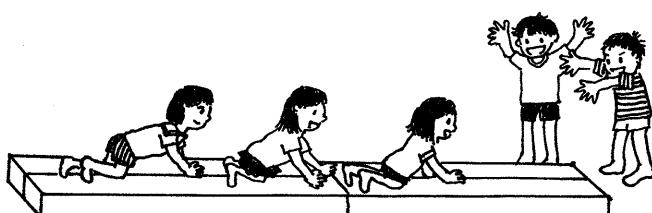
の勢いに驚き、眺めている。

私はどうこの事態を解決すればよいか心底困つてしまつた。とにかく場を変えてなん

とか二人の気持ちを転換させることはできないものか、皆
ががらがらどんになつて遊ぶ
のはどうかと考えた。

そこで、「ねえ、リズム室
へ行つて皆でがらがらどんに
なつて遊ぼうよ」と子どもた
ちに呼び掛けリズム室へ。皆
で大型積み木を並べ、高さは、
長さは、と声を掛けながら一
緒に並べ、橋に見立ててそれ
ぞれがやりたい役になつて演じて遊ぶことにした。

初めはトロル役になる人がおらず、保育者（私）が
やることになつたが、二回目からは、わたる、ゆうす



▲リズム室で皆でがらがらどんになって遊ぶ

け、たつまも名乗り出で、私は小さいやぎグループで橋を渡つた。ゆうきもりょうたもトロル役になつたり大やぎになつたり、初めは恥ずかしがつていたさと、さくみ、みさと、ななこ、あやか、れみ、あすかたちの子も大声を上げながら橋を渡り、トロルと戦う。

大きいやぎがトロルと戦い、無事橋を渡り終えると、トロルとの戦いを見守つていた中やぎさんグループも小さいやぎさんグループもワツと大喝采！ 大喜びである。こうして、何回も役を替わり、クラスの子ども一人一人全員が面白かつた！ 皆一緒に面白かつた！ と、ペープサート「三匹のやぎのがらがらどん」を自分で演ずるという体験を満喫して終わつた。

保育者として

新学期、子どもたちも保育者も、互いの関係にちよっぴり距離を感じながら始まつたこの時期、偶然生まれたさとことさくみのうさぎと亀のペープサートからがらがらどんへと変化をさせていったことへの反

省は大きい。さと、さくみの思いが熟すまで待つべきであつたのか、二人の間でうまくいかず終わつたらそれでもよかつたのではないか、保育者のお筋介がすぎたのではないか、という思いである。

しかし、クラス全体で分かり合つてゐるがらがらどんに変わつたことで、他の子どもたちへとこの遊びが広がり、そしてそこでは舞台と客席を用意する、音を入れる、観てくれる人をお願いに行く、切符が要ることに気が付き慌てて切符を作る、といつた、子どもたちから今やつてゐる遊びをよりそれらしくしようとする様々な工夫が生まれてきた。

また、ゆうきとりようたの意見の違いからペープサートは一時中断となつたが、自分たちが演じるといつた別な世界で遊び、皆で心配したり、大笑いをしたりした中で、少し幼稚園での生活の感覚を取り戻せたのではないかと思つてゐるところである。

(愛知双葉幼稚園)